

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393100128		
法人名	社会福祉法人 健慈会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)		
所在地	〒028-8202 岩手県九戸郡野田村大字玉川第5地割45-22		
自己評価作成日	令和5年10月6日	評価結果市町村受理日	令和5年12月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様一人ひとりの生活歴からヒントをいただき、その人らしく毎日穏やかに生き生きと過ごせる場所を目指します。日々の生活の中で培ってきた日課や役割を持っていただくことで、他者の役に立つ喜びを感じていただけるような支援を心掛けています。  
広すぎずちょうど良い空間で、それぞれがご自分のペースで過ごされる、穏やかで落ち着きがあるユニットです。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

三陸鉄道の野田玉川駅前に位置し、開設11年目の2ユニットの事業所である。併設の特別養護老人ホームと連携し一体的に運営している。基本理念としている、地域や家族との結びつきを重視した地域密着型サービス提供の実践に努めている。コロナ禍において、地域とのつながりの継続に苦慮しているが、中でも地域の小学校行事の見学に出掛たり、施設広報誌、ぬくもり新聞を地域住民にも回覧して情報発信に努め、出来る限り地元のイベントなどにも出掛けられるよう検討している。入居者の意思、人格を尊重した日々のケアの実践として、職員の教育研修を取入れ、重度化が見られてきた入居者には、ACPIによる話し合いを重ね、入居者ご本人が苦しまない環境の提供として、併設する特養等への住み替えを提案している。現在は、コロナ禍により認知症カフェ、こどもの居場所づくり「フリースペース」の地域貢献事業を中断している状況であるが、再始動も視野に検討している。地域の福祉活動の拠点として、地域から期待されている事業所である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年11月7日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>I.理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念をユニット内に掲示し、2か月に1度のユニット会議にて全員で唱和して共有している。また、基本理念に則った事業計画やユニット目標を設定している。	基本理念に基づいた事業計画を毎年度策定し、2か月ごとに開催するユニット会議において、毎月の目標を評価し、次月の目標を設定している。年度末に事業計画を評価、総括したうえで入居者の特性も考慮した次年度事業計画に反映させている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染対策のため依然として直接的な交流は出来ていないが、地域の駅の花植え活動など間接的な交流を継続している。また、面会方法の工夫やぬくもり新聞(年8回)の発行などできる施策を実施している。	事業所前の野田玉川駅のプランターの花植え、周辺のごみ拾い等を行い、地域の婦人会の方々と顔を合わせる機会にもなっている。また、地元小学校の運動会の見学にも、出掛けられるようになってきた。年4回発行の施設広報、毎月のグループホーム新聞を村の回覧物と併せて地域へ情報発信を図っている。	コロナ禍で中断していた認知症カフェの再開や、子どもの居場所事業の再開を予定している。法人の施設や機能も活かしながら、地域の多様な方々との交流が一層活発になることを期待します。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	上記同様に近年は実施できていない。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染対策のため開催できない月もあったが、概ね定期的に開催し管理者が出席している。出席者からいただいた意見をもとにサービス改善を検討している。	会議は、併設の特養施設と併せて開催している。構成委員として、入居者家族、村担当課、地域包括支援センター、民生委員、地域住民の方々をお願いしている。防災やコロナ対策など活発な発言やコロナ禍での面会の在り方についての提案、要望を受け、運営に反映させている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域ケア会議や研修の機会に積極的に参加し、地域の情報共有や課題解決に向けた話し合い、事例検討会などの取り組みを行っている。	毎月開催の地域ケア会議に管理者が出席し、情報交換や事例検討等を実施し、認知症事例では助言等を行っている。コロナ禍対策に、村から検査キットやマスクの配布を受けるなど、協力関係は密である。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人として権利擁護委員会(身体拘束廃止・虐待防止)を設置し、身体拘束廃止に向けた話し合いや取り組みを行っている。外部研修に参加した際には伝達講習を行ったり、施設内研修を毎年開催し職員の知識・技術向上、意識啓発に取り組んでいる。	施設長、管理者、ケアマネ、相談員で構成する権利擁護委員会(身体拘束防止・虐待防止)を3か月ごとに開催している。また、実際のケア場面を動画にした振り返りの研修を年2回実施しグループワークで話し合うとともに、言葉遣い見直し月間を設定しポスターを掲示して啓発に努めている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人として権利擁護委員会(身体拘束廃止・虐待防止)を設置し、常に虐待防止を意識した支援を行っている。施設で一丸となって取り組めるよう、権利擁護ガイドラインの説明や研修等を企画・実施している。また、スピーチロック防止のポスターを掲示し啓発に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者を中心に研修会に参加している。支援の必要性のある利用者については、本人・家族と相談しながら必要な支援が受けられるよう対応している。基幹社協が運営している権利擁護センターとも連携している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の際に契約書や重要事項説明書は丁寧に説明するよう努めている。また、不安や疑問点についてはいつでも相談できるよう声をかけ、後日の電話相談やSNS相談にも対応できることを伝えている。利用中の問い合わせについても十分な納得が得られるよう説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族来設時や電話連絡の際には近況報告を行いながら家族からの意見も引き出せるような雰囲気づくりを心掛けている。また、利用者家族から要望があった際は対応可否について管理者を含めて検討の機会を設けている。	運営推進会議の家族委員からのご意見を伺ったり、面会や通院付き添い時などにご意見や要望等を伺う事がある。また、入居者の3分の2のご家族がライン登録をしており、個別に相談や入居者の近況等の情報提供に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	隔月のユニット会議で、ケアや業務に関する意見を検討する場を設けている。また、年に1回職員と管理者の面談を実施し、意見や要望を聞き取る機会を設けている。	今年から管理者と個別面談を実施し、多様な意見を受け止めながら、今後のキャリアや勤務シフト等の相談の機会にもしている。管理者、各ユニットリーダーが双方のユニット会議に出席し、入浴対応等のケアの検討や施設設備の修繕等の要望等を受け、可能なものから具体化している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員の生活背景を理解し、労働条件を考慮した勤務時間や就労環境の整備に努めている。また、資格取得に積極的に取り組めるよう相談に応じている。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内のOFF-JTには参加しているが、OJTに課題を抱えている。休職者やコロナ感染によるマンパワー不足や利用者の重度化にともなう負担増により人材育成の機会を逸している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染対策やマンパワー不足により外部との交流には参加できていない。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前後には利用者様及び家族と面談を行い、意向や情報を確認しながら対応している。また、入所後は声がけや傾聴を意識しながら、生活の継続性が保たれるよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者様一人ひとりの家族と連絡を取っている。電話や手紙、SNSを活用して相談しやすい手段を複数用意している。また、来設時には近況報告を行ったり、不安の聴取、要望の確認を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	エンゲージメント面談の際に、利用者様及び家族が必要としている支援の優先順位を整理し、他の地域資源にリファーしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様の能力に合った作業を提案し、できることをしていただくよう支援している。作業後には感謝の言葉を伝えることで、役割を感じていただくことの重要性を感じている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と接する機会に積極的にコミュニケーションを図り、近況を伝えている。また受診は家族対応を基本とし、協力し合いながら支えあうようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	複数の面会形式を用意し、感染状況に合わせて使い分けている。施設内で以前からの知り合いや同郷の利用者様同士で交流できる機会を設け、家族以外の知人との面会も益々増えている。	生活歴や家族からの情報により、馴染みの人や場を把握している。家族の他、知人や隣人、デイサービス利用者との面会が増えている。年3、4回バスレクとして、自宅巡りやまつりの山車見学などに出掛け、道の駅に立ち寄り飲食も楽しんでいる。毎月地元理容業者が訪問しているほか、馴染みの美容院に出掛ける方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の関係性を観察し、これまでに培ってきた人間関係、社会とのかかわりを把握し、良好な人間関係を保てるよう支援している。必要な時は職員が間に入り声をかけ、関係構築支援を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退所など、環境変化に伴い新しいサービスに円滑に移行できるよう本人の状態や習慣等を細やかに情報提供している。電話や北三陸ネットを活用し、医療介護連携を進めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様の意向や希望があったときは、それを実現することができるよう、職員間で検討している。	担当職員を中心に常時入居者からの思いや要望を聴き取るようにしている。言葉での意思表示が難しい方は日常を観察しての仕草や表情、ご家族からの情報に基づき意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前から今までの生活歴を振り返り、情報として職員間で共有し、サービス提供に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の過ごし方を記録に残し、どのような支援をしたら良いか、話し合いながらケアを実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ユニット会議やカンファレンスの場で意見を出し合いながら、必要なケアを相談し、また、家族からも協力を得られるよう連携している。	モニタリングは担当職員が中心となってケアマネと共に行い、家族の意向を加味して介護計画案を作成している。原則6か月毎にサービス担当者会議で原案についてカンファレンスしている。苦しまない環境を要望される方もおり、ACPIによる検討も行っている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者様個々のカルテに日々の関わり、観察等も大切にし記録することで日常の支援に活かしている。また、業務ノートを活用することで、情報を共有し介護計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟な支援やサービスを提供するため、利用者様や家族の意向に沿えるよう、検討しながら取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍により以前のようなかかわりは持ていないが、お祭り見学やバスレクでの買い物など、地域との関わり、楽しみを持てるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設入所前から関わりのあるかかりつけ医を受診し、適時家族へ情報提供し、適切な医療を受けられるよう支援している。	入居時に通院は原則家族での対応をお願いしている。遠方にいる家族からは、事業所での付添いを依頼する方もいる。毎月、地元歯科が訪問され、入居者とも馴染みとなっている。特養看護師が24時間オンコールの体制をとっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタルの変化や入浴時の身体観察における気づき、受診時の情報を共有し、適宜相談し助言を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退院時は家族、医療機関と情報提供・共有を行い円滑な治療を受けられるよう、また、退院後の生活に支障をきたさないよう連携している。北三陸ネットも活用し医療関係者と協働している。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ADLの急変や医療ニーズが必要になる場面では、家族や医療機関と連携を図り、施設ではどのような対応が可能なのか話し合いの機会を設けている。施設機能として対応困難な場合は他サービスヘルパーを行っている。	事業所として看取りは行っていないが、重度化が進んできた方には、家族、スタッフ等による話し合いの機会(ACP)を設け、特養等への住み替えを提案している。看護師による看取り、緩和ケアの研修や特養でのデスカンファレンスへの参加機会を設けている。職員に看取りについてのヒアリングも行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者様のリスクを一覧にまとめ管理を行う事で個々のリスク把握に活かしている。委員会を中心に定期的に心肺蘇生法や、救急時の対応方法の研修を行う事で実践力を身に付けている。急変時はフローチャートに則り連携している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、災害対策担当者により避難訓練を実施し、避難経路や利用者様の避難能力の確認をしている。常に物品の備えを行い、福祉避難所としての役割を果たせるよう心掛けている。今後は地域との連携が課題となる。	年2回、夜間想定を含めた避難訓練を実施し、消防署も立ち合っている。年1回、通報訓練も実施している。非常時は管理者からLINEで職員に一斉通報する体制が確保できている。食糧、水等を備蓄し、非常電源も備えている。	現在進めている事業継続計画の策定に併せて、災害対策全般を見直すとともに、併設の特養との連携や地域協力(自主防災組織の確認)を一層図ることを期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様個々の性格を理解することが出来るよう努め、その人らしい過ごし方を尊重したケアができるよう工夫している。	権利擁護委員会主催の研修を行い、また管理者からは、言葉遣い、スピーチロックなど、職員個々や自身の親の立場に置き換えて振り返りを行っている。家族の状況や排泄等のプライバシーに関することは、大声で誘導しない、居室で聴き取りするなど、各ユニットリーダー、ケアマネからも助言等を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	話しやすい雰囲気づくりに努め、利用者様同士の日常会話や職員とのコミュニケーションの中で、会話の内容や表情・行動から、自己決定が成されるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の心身の状態を見ながら本人の希望に沿い、食事や入浴に対応し、穏やかに過ごせるように支援している。身体機能や認知機能の変化を観察しながら、無理なく過ごせるよう見守りを行っている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者様から直接聞き取り、また、家族に相談しながら身だしなみを整え、利用者様が好むものを身につけることが出来るよう支援している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	レク等で利用者様と一緒に準備、食事、片づけを行う事で、楽しみながら食事をしていただけるよう取り組んでいる。また地元の食材や旬の食材(松茸やウニ)など特別食として提供する機会を設けている。	メニューは両ユニット共通であるが、それぞれにアレンジして提供している。入居者家族からマツタケやウニなどの食材をいただくことも多く、調理後の写真と共にお礼を伝えている。外食の機会が減り、月1回、お寿司のテイクアウトを提供している。入居者は、家庭菜園の野菜類等の下拵え、近所の商店に食材やおやつの買い出しを手伝っている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日を通じて食事摂取量、水分摂取量を把握し、個々の心身の状態、既往歴に沿って支援を行っている。水分補給時、ひとり一人の嗜好に合わせて提供している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科と連携し定期的な検診を行うことで、一人ひとりの状態に合わせて毎食後口腔ケアを行っている。本人の能力に応じ、声掛けや見守り、磨き直しをチェックしている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者様個々の生活リズムに合わせて、できるだけトイレでの排泄が続けられるよう、支援に努めている。心身の状況に合わせた介護用品を使用し、機能低下させないように検討して支援している。	排泄チェック表でパターンを把握して、見守り・声掛け・誘導を行い、全員がトイレで排泄している。夜間ポータブルトイレを使用する方は数名いる。自宅では排泄の失敗があった方で、入居後の細やかな観察や適切な声掛け誘導で失禁が改善された方もある。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の排便確認を行い、好みに合わせた水分摂取を促し便秘を予防している。必要な方には医師と相談し個々に合った便秘薬を使用している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者様のタイミングに合わせて入浴を行っているが、マンパワー不足により要望に沿えない事がある。また、ADL低下により普通浴が困難になる事で、関連施設の特殊浴槽を使用する必要があり、日程調整により入浴日が限定されることもある。	週2、3回提供している。入浴を拒まれる方には、着替えや足湯など柔軟な対応を心掛けている。浴槽が一般浴槽のため、身体機能の低下がみられる方は、特養の寝台浴槽で入浴を提供している。入浴中は介助の職員との会話が弾んでいる。		



令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室の環境調整を行い、安心して過ごしていただけるように工夫している。夕食後それぞれのペースで入眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	与薬マニュアルを活用し誤薬防止に努めている。処方薬の説明を理解し、医務と連携しながら日々の症状変化に注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者様の生活歴を確認し、個々人の能力に合わせた役割(茶碗拭き、モップ掛け、洗濯物たたみ、食材配達など)を提案し、家事や活動の機会を設けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症対策のため積極的な外出は行っていない。美容院など、利用者様と家族の希望があれば、感染拡大状況を確認しながら支援している。	事業所前にある野田玉川駅のプランターの花の世話や周辺のゴミ拾い、事業所の菜園で野菜の栽培などで外気浴と気分転換をしている。春の花見・秋の紅葉狩りなどのドライブに出かけ、道の駅に寄って楽しんでいる。家族と通院同行後ドライブし外食される方もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	必要なものは購入できる環境を整えている。昨今は外出やレクを控えていたこともあり、利用者様自らお金を使う機会は減少している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者様の希望に応じて、電話をかける支援、かかってきた電話を取り次ぐ支援を行っている。毎年の年賀状も継続している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースは季節に合わせた飾りや掲示物で装飾している。不要な刺激を避けることが出来るよう、安心安全な環境整備に努めている。	食堂兼談話室には、テーブル、椅子、ソファ、大型テレビが置かれ、エアコンと床暖房、空気清浄機により快適な環境が保たれている。壁面には職員と一緒に制作した七夕祭り、花火、ハロウィン飾りや行事の写真が飾られ、季節感や潤いが感じられる共通空間となっている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食席で過ごしたり、外が見えるソファで過ごしたり、ひとり一人が自由に過ごすことができるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者様や家族の希望でなじみのある物を自宅から持参していただき、自分らしい居室空間にしたいだけ配慮している。	居室入口に利用者お気に入りの暖簾が名札代わりに下げられている。居室にはベッド、洗面台、タンス、エアコンが設置され、テレビ、衣装ケース、家族写真を個々に持ち込んでいる。できる方には床のモップ掛け、タンス、手すりの拭き方もしていただいている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室内外の動線や、食席の組み合わせなど、利用者様のADLや好みに応じて工夫している。		